

## 巻頭エッセイ

### 新潟開港150周年に寄せて

林 慎一

三井E&S造船株式会社  
取締役営業本部長



5月に令和元年がスタートしてから半年が過ぎました。今年は函館港、横浜港、長崎港、北九州港、伏木港、清水港など、幕末から明治にかけて開港され、開港記念日を迎えた港が複数あります。その中で開港150周年を迎えたのが新潟港です。江戸幕府と新政府の戊辰戦争の影響から、函館、横浜などから10年遅れの開港でした。今年は新潟市でこれを祝うたくさんの方の行事が開催されております。私事ではありますが、2016年から2017年まで2年弱の間弊社子会社の新潟造船に出向し、本社の在る新潟市に住まっておりました。港と共に発展してきた新潟の街の成り立ちを振り返ってみようと思います。

新潟県が、1874年～76年、82～83年の県別人口日本一（130万～160万人程度）であったこと、ご存じでない方も多いと思います。米をはじめとする農産物が豊富であったこともその一因ですが、最大の理由は江戸初期以降、北前船による海運の要衝であったことが挙げられます。2016年にNHKの某番組（そう、有名タレントと女子アナが全国を回って「何故〇〇の街は××なのか？」を解き明かす、あれです）でも取り上げられていましたが、元々新潟の街は信濃川の河口にあったものを、どんどん積もる砂の処置に困り果て、1655年に街全体を中州に移したそうです。中州は当然砂で出来ています。柔らかい砂をやすやすと掘って網の目の如く運河を巡らし、町全体を港にしました。これが大成功、船が沢山来て多くの富をもたらし、新潟の町は大いに栄えました。砂上の楼閣は儂く潰え去るものですが、砂上の要衝はしぶとく稼ぎ続ける、と言う訳です。

後に船が大型化するに従って運河が使われなくなり、ついには使われなくなったため、これを全部埋めてしまって道路にしました。そのせいで新潟の旧

市街では、多くの道が運河なりに曲がっていて、通りの名前も東堀通り、西堀通り…と「堀」が付きます。因みに東堀と西堀の間を走るのが古町通りという細い通りで、とても風情のある通りです。私だけでなく、この通りのファンの方が多いと思います。

運河を埋めて道路にしてしまいましたが、その後も信濃川と阿賀野川が、上流からどんどん砂を流してきて河口に積み上げます。国交省の大型浚渫・油回収船3隻のうちの1隻「白山」が信濃川河口の北陸地整・新潟港湾空港事務所に配備されていることも、宜なるかな、です。因みに新潟造船は新潟港湾空港事務所のすぐ隣、河口至近の地にあります。ご想像に違わず、毎年浚渫しないと新造船や修繕船の係留、入出渠、進水に支障を来します。この対応が新潟在勤中の頭痛の種の1つでありました。

かくの如く砂も人の役に立ったり厄介者であったりいたしますが、世の中のお役に立ちたい弊社の話を少々紹介させて下さい。船舶の分野でのCO<sub>2</sub>排出規制の強化、LNG燃料の活用需要の増加に対応するため、ドイツのガスエンジニアリング会社TGE社を2015年に傘下におさめました。ガスハンドリングシステムを始め種々製品の提供を通して、低炭素社会の実現に向けた取組みを進めています。その他、海上輸送の安全性向上と船員の労働負荷低減、労働環境改善への貢献を目指した船舶の自律化技術の開発等にも取り組んでおり、その手始めとして船舶の自動離着岸技術の開発を進めています。今後も作業船を始めとする様々な船舶に関する課題やニーズに対するソリューションの提供に努めつつ、これからの日本の港湾や地域、産業の発展に貢献できるよう取り組んで参ります。皆様から折に触れご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。